

第五章 制 限 方 式

序 說

海軍軍備制限方式ニ付從來問題トナリタル處ヲ舉クレハ之ヲ大別シテ艦種別制限方式ト總噸數制限方式ト二トナスヲ得ヘシ、華府制限條約ニ依リ決定セラレタル方式ハ前者ニ屬シ其ノ制限方式ノ適用ヲ受クヘキモノトセラレタルハ主力艦及航空母艦ノ二艦種ニ止マリ補助艦ニ付テハ單ニ單艦最大排水量及備砲最大口径ヲ制限セルニ止レリ

千九百三十年倫敦海軍會議主要目的ノ一ハ實ニ前記ノ如ク協定ニ達スルヲ得サリシ補助艦ニ付テ適當ナル制限方式ヲ妥結シ之ニ依リテ海軍軍備ノ全般ニ互リテ縮少制限ヲ行ハムトスルニアリタリ

第一節 制限方式ニ關スル論議ノ推移

(一) 所謂佛國妥協案ノ提案ニ至ル迄ノ經過

華府會議
後ニ於ケル
補助艦
制限問題

府三國會議ナリ

軍縮準備
委員會ニ
於ケル討
議

前者ハ千九百二十六年五月以降爾來今日ニ至ル迄海軍軍備ニ止ラス陸軍及空軍モ併セ三軍ニ關スル制限方式等ニ付研究ヲ進メツツアルカ海軍軍備ノ制限方式ニ關シテハ總噸數制限主義ヲ主張スル佛伊等ト艦種別制限方式ヲ可トスル日英米等トノ對立ヲ見爲ニ軍縮準備委員會ノ議事停頓ヲ見ルニ至レリ

茲ニ於テ絶對的ナル總噸數主義ノ貫徹不可能ナルヲ認メタル佛國側ハ千九百二十七年四月總噸數主義ニ艦種別主義ヲ加味シタル一ノ妥協案ヲ軍縮準備委員會ニ提案シタリ

「ボール、
ボンクール」
案

同案ハ佛國妥協案又ハ之ヲ提案セル佛國委員ノ名ヲ藉リ「ボール、ボンクール」案ト稱セラルルモノニシテ今次會議ニ於テ事實上制限方式ニ關スル討議ノ基礎トナレル佛國妥協案ノ前身ナリ、該案ハ要スルニ主力艦航空母艦一萬噸以下ノ水上補助艦及潛水艦ノ四艦種ヲ設ケタル點ニ於テ艦種別主義ヲ取入レ、龍骨据付前一定期間ニ於ケル豫告ヲ以テ右艦種間ニ融通ヲ爲シ得ルモノトシ以テ總噸數主義ヲ加味シタルモノナリ、然ルニ時恰モ日英米壽府三國會議ノ直前ノコトトテ主要海軍國ハ何レモ明確ニ其ノ態度ヲ示スコトヲ避ケタルモ我方ハ佛國妥協案ニ一定ノ修正ヲ加フルニ於テハ之ヲ討議ノ基礎トスルニ客ナラスト述ヘ英ハ之ニ反對シ伊ハ依然總噸數主義ヲ固執シ僅ニ龍骨据付前六ヶ月ノ豫告ヲ認メタルニ過キス

米ハ何等明確ナル意見ヲ表示セザリキ

(二) 英佛妥協案前後ノ經過

壽府ニ於
ケル日英
米三國軍
縮會議
米國政府
請ニ應ジ
不參加

日英壽府
不參加

日英米三國會議ハ右ニ述ヘタル軍縮準備委員會々合ノ後ヲ承ケ千九百二十七年六月ヨリ八月初メ迄開催セラレタルモノナリ是ヨリ曩キ既ニ軍縮準備委員會ニ於ケル總噸數制限方式ト艦種別制限方式ト對峙ノ情勢ニ鑑ミ米國側ニ於テハ大體ニ於テ制限方式ニ關シ意見ヲ同ウスル日英米ノミニテモ合意ニ達シタシトノ希望アルヤニ察セラルル節アリシカ果シテ米國政府ハ壽府會議開催方ヲ日英佛伊四國ニ申入レタリ

右合衆國政府ノ招請ニ接シ日英兩國カ之ニ應ジタルニ對シ佛伊ハ單ニ傍聽者ヲ出スニ止マリタリ、佛伊不參加ハ或ハ軍備ノ制限ハ海軍軍備ニ止マラス陸空軍ニモ及ホスヘシトカ或ハ軍縮準備委員會ノ存スル以上別途會議開催ノ要ナシトカ主義上其他政治上ノ理由ニ基キタルモノナルコト勿論ナルヘキモ又一方制限方式ニ關シ大體日英米對伊佛ノ對立アリタルニ因ルト見テ大過ナカルヘシ、軍縮準備委員會ニ於ケル情勢前記ノ如ク三國會議モ亦何等具體的結果ニ達セザルニ及ヒテハ之カ局面打開ノ方法ハ一ニ制限方式ニ關シ主要海軍國間、殊ニ總噸數主義ヲ唱ヘ次テ妥協案ヲ提出セル佛國ト最モ嚴格ナル艦種別主義ヲ主張シ佛國妥協案ヲ以テ總噸數主義ノ「カムフラージュ」ニ過キスト迄痛撃セル英國トノ間ニ何等

一九二八年七月英佛協案ノ成立
帝國ノ同意
對米國ノ反
對伊國ノ反

軍縮準備委員會ニ於テ海軍問題ヲ討論
中止

一九二九年四月軍縮準備委員會

カ妥協ヲ見ルコトカ其ノ先決問題タルニ至レリ、然ルニ千九百二十八年七月末所謂英佛妥協案ノ成立ニ依リ英佛間ニ意見ノ一致ヲ見爲ニ海軍軍縮事業進展ノ曙光ヲ認メ得タルヤニ感セラレタリ然ルニ帝國ハ軍縮事業促進ナル終始論ヲサレ大目的ヨリ主義上前記英佛妥協案ヲ討議ノ基礎トナスコトニ同意(本章末尾附屬書參照)シタルモ米國ハ英佛妥協案カ制限ヲ一切ノ戰闘用艦艇ニ及ボササルヲ以テ之ヲ討議ノ基礎トナスニ同意シ難キモ寧ロ前顯佛國妥協案ヲ以テ討議ノ基礎トナスコト有益ナルヘシトテ之ニ反對シ伊國モ亦贊意ヲ拒ミ軍縮ノ前途再ヒ暗澹タルモノアルニ至レリ

米國反對ノ主タル理由ノ一ハ英佛妥協案ニ依ル制限方式カ八吋砲巡洋艦ノ制限ニ急ニシテ輕巡洋艦ニ緩ナル點ニアリタルナリ

前記ノ如ク海軍軍縮制限方式ニ付テハ常ニ幾多ノ困難ヲ惹起シ居ル次第ナルヲ以テ國際聯盟軍縮準備委員會ハ海軍問題ニ暫時觸ルルコトナク右問題ニ付テハ主要海軍國間ニ交渉ヲ行ハシメ何等カノ具體的結果ニ達シ得ル迄海軍問題ノ討議ヲ一先ツ中止スルコトトシタリ

千九百二十九年四月ノ軍縮準備委員會ハ右ノ如キ狀勢ノ裡ニ開カレタルモノナルヲ以テ輿論ハ必スシモ之ニ大ナル期待ヲ繫カサリシ處大統領改選後ノ新政府ノ訓令ニ接セル米國委員ハ同委員會ノ席上ニ於テ米國側ニ於テハ一ノ制限方式案ノ用意アルコト佛妥協案ノ討議ノ基礎トシテ有益ナルヘキコト等ヲ述ヘ協調的且實際的ナル態度ヲ示シタリ、右米國委員ノ聲明ハ實ニ空谷ノ足音ニシテ種々揣摩臆測ノ因タリシ英佛妥協案以後ノ沈滞セル國際零團氣ヲ四散シ軍縮ノ前途再ヒ洋洋タルヲ思ハシムルニ至レリ、只其ノ事タルヤ重且大ナルヲ以テ各國委員共ニ本國政府ト打合セノ要アリ且英國側トシテハ自國總選舉前ノコトトテ決定的意見ノ表明ヲ躊躇セサルヘカラサル地位ニアリタルヲ以テ我方委員ノ提議ニ因リ一ト先ツ軍縮準備委員會ニ於ケル海軍問題ノ討議ヲ打切りトシ關係國間ニ交渉ヲ行ハシメ其ノ具體的結果ニ達スルヲ俟テ委員會ヲ召集スルコトトシタルカ其後關係國殊ニ英米、日英米間ノ内交渉行ハレ、英首相ノ訪米トナリ次テ倫敦會議ノ開催ヲ見ルニ至リタルコト第一編第一章ニ記述セル通りナリ

第二節 會議直前ノ形勢

一九二九年十二月二十日佛國政府覺書

(一) 千九百二十九年十二月二十日佛國政府覺書

倫敦會議開會ニ先テ佛國政府ハ千九百二十九年十二月二十日一ノ覺書ヲ發シ同會議ニ對スル自國ノ見解ヲ述ヘ制限方式ニ關シテハ

「壽府ニ於テ海軍制限ニ關シニ方式ノ對立ヲ見タリ總噸數ニ依ル制限及艦種別ニ依ル制限之レナリ強大海軍國カ後者ニ贊意ヲ表セルニ對シ他ハ總テ前者ヲ採リタリ」

「右ノ如ク對立セル見解ノ調整ヲ容易ナラシメムカ爲佛國全權部ハ既ニ千九百二十七年四月一ノ妥協方式ヲ提案シタル處右方式ハ今次會議ニ代表者ヲ出シ居ラサル一切ノ海軍國ニヨリ受諾セラレ且他ノ數國ヨリ好意ヲ以テ迎ヘラレタリ殊ニ米國政府ハ再度ニ互リ右方式ヲ以テ討議ノ基礎トナスニ客ナラサル旨ヲ公ニシタリ右方式ハ總噸數ニ依ル制限ヲ該噸數ノ重要艦種間ニ行フ配分ノ公表並一艦種ヨリ他ノ艦種ヘノ融通ヲ規定スルコトニヨリ補足セムトスルモノナリ

佛國政府ハ總噸數制限ヲ可トスルモノナルモ今尙ホ前記妥協方式ニシテ一般協定ノ實現ヲ可能ナラシムルニ於テハ之ニ贊意ヲ表スルニ客ナラス」

トシ右ニ關スル立場ヲ明ニシタリ

(二) 佛國妥協案ノ提示

佛國妥協案ノ提示

前記(一)ニ記載セル如ク制限方式ニ關スル佛國政府ノ態度ハ壽府ニ於ケルト倫敦ニ於ケルト何等變更ヲ見サルカ只佛國妥協案ノ内容ニ至リテハ千九百二十七年當時ノモノニ對シ加ヘラレタル反對ヲ考慮シ若干ノ修正ヲ經タリ、即チ千九百三十年一月九日在英佛國大使館附海軍武官カ佐藤事務總長ヲ來訪シ手交シタルモノニ就テ見ルニ佛國妥協案カ初メ一萬噸以下ノ水上艦艇ヲ單一ナル艦種ニ包含セシメ居リタルヲ備砲ノ口徑ニ依リテ之ヲ二分シ且右制限方式ハ公表及代換ニ

ヨリ補足セラルヘキモノトセル如キハ其例ナリ

佛國妥協案左ノ如シ

佛國妥協案

佛國妥協案

海軍器材ノ制限ハ浮動器材ノ制限ニ依リテ之ヲ行フ、右制限ハ

一、制限方法

二、公表方法

三、代換規定

ヲ含ムモノトス

一、制限方法

甲、浮動器材ノ制限ハ總噸數戰闘單位トシテ使用シ得ヘキ一切ノ艦艇ノ單艦排水量ノ合計ニ付キ之ヲ行フ但シ特ニ制限ヲ受ケサルモノト定メラレタルモノヲ除ク

各締約國カ本條約實施期間中超ユルコトヲ得サル最大總噸數ヲ、噸ト定ム

第一表ハ前項ニ定メラレタル共通ノ限界及安全保障ノ現狀ヲ考量シ各締約國カ本條約實施期間中超ユサルコトヲ宣明スル總噸數ヲ示スモノトス

乙、本條約ノ實施以後起工セラルル艦艇ノ單艦基準排水量ハ、噸ヲ超ユルヲ得ス

丙、本條約ノ實施以後起工セラルル艦艇ノ備砲ハ口徑：耗ヲ超ユルヲ得ス

二、公表方法

第一項ニ掲クル制限ハ左ノ公表方法ニヨリ補足セラル

甲、第二表ハ艦種別ニヨル噸數ヲ以テ各締約國カ本條約實施期間中夫々第一表ニ掲クル數量ニ限定セル總噸數ヲ配分ス

ル體様ヲ掲ク

各艦種ニ對スル右噸數ハ現用中 (on service) ニシテ且當該艦種ノ特性ヲ有スル一切ノ艦艇ノ單艦排水量ノ合計ニシテ條約實施期間中超過セサルヘキ噸數ニ等シ

甲 艦 種 單艦基準排水量一萬噸ヲ超ユルカ又ハ備砲口徑二〇三耗ヲ超ユルモノ

乙 艦 種 備砲口徑一五五耗ヲ超ユル水上輕艦 (Bâtimens légers de surface)

丙 艦 種 備砲口徑一五五耗以下ノ水上輕艦

丁 艦 種 潛水艦

戊 艦 種 航空母艦

己 艦 種 特殊艦船 (敷設艦、練習艦、航空機運搬艦等)

乙、第一表ニ掲ケラレタル總噸數ノ限度内ニ於テ且締約國カ現ニ當事國タリ又ハ今後當事國タルコトアルヘキ特殊條約ニ基ク一層嚴重ナル條件アル場合ヲ除キ各締約國ハ左ノ二條件ノ下ニ右配分ヲ變更スルヲ得

(一) 第二表ニ掲クル艦種ニ依ル噸數ハ如何ナル場合ニ於テモ、ヲ超ユルヲ得ス (「ヲ超ユルヲ得ス」ノ字句ハ後「附屬表ニ掲クル數量ヲ超ユル増加又ハ控除ヲ受クルヲ得ス」ト改メラル)

(二) 一艦種ヨリ他艦種ヘ融通スヘキ噸數ハ融通セラレタル噸數ニ該當スル艦艇ノ龍骨据付前少クトモ一ヶ年前ニ他ノ締約國ニ通告セラルヘシ

丙、各締約國ハ自國ノ爲ニ建造セラルル一切ノ艦艇ノ龍骨据付後一ヶ月以内ニ右艦艇ノ艦型及排水量ヲ公表スヘシ、右公表ハ進水ノ際右艦艇ノ主要兵裝ノ公表ニヨリ補足セラルヘキモノトス

三、代換規定 (後ニ削除)

甲、亡失ノ場合ヲ除キ、如何ナル艦艇ト雖モ甲艦種ニ付テハ艦齡、年、乙艦種ニ付テハ艦齡、年 (等) 滿了以前ニ於テ代換シ得ルモノト見做サルヲ得ス (本項ハ後削除セラル)

從テ新ナル單位（軍艦）ノ之ニ相當スル噸數ヲ以テ代換セラルルヲ得ス（本項ハ後削除セラル）
未タ就役中ノモノト宣明セラレサル場合ニ於テモ建造中ノ艦艇ハ其ノ龍骨据付後甲艦種ニ付テハ、年、乙艦種ニ付
テハ、年ヲ經過セルトキハ之ヲ就役中ノモノト看做サルヘシ（本項ハ後第二ノ丁トナル）

乙、各締約國ハ其ノ噸數ヲ第一表ニ掲クル總噸數ニ依ル限界及第二表ニ掲クル艦種別配分ニ基ク各限界内ニ維持スルカ
爲ニ新艦艇就役ニ當リ之ヲ現用中ニ保持スルニ於テハ右限界ヲ超過セシムヘキ舊艦艇ヲ處分スヘシ（本項ハ後ニ削除
セラル）

右處分ハ本條約所定ノ條件ニ伴ヒ行ハルヘク且他ノ締約國ニ通報セラルヘキモノトス（本項ハ後削除セラル）

第一表 總噸數ノ制限

締約國	總噸數
合衆國	
英帝國	
佛蘭西國	
伊太利國	
日本國	

第二表 總噸數ノ配分

締約國	基準排水量一萬噸ヲ超ユルカ又ハ備砲口徑二百三十八吋ヲ超ユル艦船	備砲口徑百五十五吋ヲ超ユル水上輕艦	備砲口徑百五十五吋以下ノ水上輕艦	潛水艦	航空母艦	特殊艦船（敷設艦、練習艦、飛行機運搬艦等）
合衆國						

英帝國	佛蘭西國	伊太利國	日本國

(三)

佛國妥協案ノ主要點

一、制限方式ニ關スル部分

(イ) 條約期間中如何ナル條約國ト雖モ超過スルヲ得サル最高限度

右ノ如キ最高限度ヲ定メトスル思想ハ既ニ千九百二十八年ノ英佛妥協案中ニモ掲ケラレタル處ニシテ各締約國ニ於テ右ニ達セムト欲スルニ於テハ必スシモ不可能ナルニ非サルカ如キ觀ヲ條約面ニ表ハサムトスルモノニ過キスシテ其ノ根本ノ動機ハ小海軍國ノ面目ノ問題タリ

(ロ) 條約實施後起工セラルル艦艇ノ最大排水量及備砲最大口徑

今次會議參加國ニ關スル限リ其ノ主力艦、航空母艦及補助艦ノ單艦最大排水量及備砲最大口徑ニ付華府條約ニ基ク制限存スルモ右以外ノ國ニ關シテハ何等制限ナキヲ以テ右ニ處スル爲此種規定ヲ必要トストノ佛國側見解ナリ、然レトモ今次會議ノ結果タル協定ヲ壽府ニ於テ開催セラルルコトアルヘキ一般の軍縮會議ノ準備タラシムルコトナク獨立ニ實施セシムルコトヲ趣旨トスル場合ニハ無用ナル規定ト謂フヘシ

二、公表方法ニ關スル部分

(イ) 佛國妥協案ノ文理解釋ニヨレハ各國カ其ノ保有噸數ヲ艦種ニ類別スルハ全ク自由ニ決定シ得ルカ如クニ看取セラ

ル、其ノ後第一委員會ニ於テ佛國側カ制限方式ニ關スル英國決議案中 The figures of global tonnage which each Power will not exceed during the period covered by the agreement shall be allocated in the case of each Power on an agreed basis

to the following categories ナル一箇中ノ“on an agreed basis”ノ語ニ付テモ同様ナル疑義ヲ生シタルハ後記ノ通りナリ
(ロ) 條約期間中各締約國カ自國保有噸數ヲ配分スル艦種

甲艦種(一萬噸ヲ超過スルモノ又ハ二〇三耗ヲ超ユル砲ヲ有スルモノ)ハ主力艦ニ、乙艦種(備砲口徑一五五耗ヲ超ユルモノ)ハ八吋砲艦ニ、丙艦種(備砲口徑一五五耗以下ノモノ)ハ輕巡洋艦及驅逐艦ヲ一括セルモノニ相當ス
右艦種類別ノ方法ヲ見ルニ我方ニ於テハ特殊艦船ヲ一ノ艦種ト認メサルニ反シテ佛國妥協案ハ之ヲ一ノ艦種ト爲セリ
此點ヲ除ケハ他ハ(但我方案ニヨルモ佛案ニ依ルモ何レモ制限ヲ之ニ加フルモノナルニ依リ其ノ制限ヨリ見タル結果ハ同一ナリ)我方ノ夫レト同一ナリ、但艦種ヲ規定スルニ排水量ト備砲口徑ト併用セル場合ト(主力艦ニ相當スル甲艦種)單ニ備砲口徑ノミニ依ル場合アルハ首尾一貫セサル憾アルノミナラス整備兵力ノ安定ヲ害シ不安ノ念ヲ惹起セシムヘシ

(四) 千九百三十年一月十日附英國政府對佛覺書

前顯十二月二十日附佛國覺書ニ對シ英國政府ハ千九百三十年一月十日一ノ覺書ヲ發シタルカ同覺書ハ制限方式ニ關シ「佛國政府ハ「總噸數」ニ依ル海軍軍備制限方式ニ言及セラレタリ、英國政府ハ海軍軍縮問題ヲ一切ノ艦艇ノ艦型、噸數及備砲ノ嚴重ナル制限ニ依リ處理スルヲ可トスル旨ヲ常ニ表明シ來レリ、蓋シ他ノ制限方式ハ倫敦會議ニ於テ之ヲ除去スルコトヲ以テ其ノ明白ナル目的ノ一ト爲スヘキ競爭及不安ノ要素ヲ全ク除去シ得サルノ傾向アルコトヲ信スレハナリ海軍軍備ノ問題ハ營ニ噸數ノミナラス之カ使用方法ノ問題ヲ包含ス、尤モ英國政府ハ佛國政府ノ言及セラレタル「妥協案」ヲ慎重研究シタル上該提案ヲ基礎トスル協定ノ可能ナリヤ否ヤヲ討議スルノ用意アリ」ト述ヘタリ

右ノ如ク英佛共ニ夫々艦種別制限方式及總噸數制限方式ヲ支持シツツモ然カモ尙佛國妥協案ヲ討議ノ基礎トスルコトニ歩ミ寄リタリ我方ニ於テモ前顯ノ通り佛國妥協案ノ艦種類別方法其ノモノニハ必スシモ異議ヲ有セス、因テ他ニ對案ノ提

示ナキ限リ制限方式ノ審議ハ佛國妥協案ヲ基礎トシテ行ハルヘキ形勢次第ニ顯著トナリタリ

(五) 在英佛國大使「ド、フルリオ」若槻全權來訪

一月十四日
日若槻
フルリオ
談リ
會

一月十四日在英佛國大使若槻全權來訪シ前日(十三日)英首相トナシタル會談ノ内容ナリトテ左ノ如ク語リタリ

制限方式ニ關スル部分ニ付テハ佛國側ハ艦種間ノ融通ヲ最重要視スルモノニシテ右融通カ佛國主張ノ如ク上下何レノ艦種ヨリモ之ヲ認ムルヤ將又上級艦種ヨリ下級艦種ノミニ認ムルヤニ依リ各國保有量ニ大ナル影響アルヘシト同大使ノ語レルニ對シ英首相ハ如何ナル場合ニ於テモ融通ハ一割五分以下ヲ適當トスヘシト述ヘ次テ同大使ハ主力艦ハ華府條約所定ノ單艦最大排水量ヲ半減シ又其ノ備砲最大口徑ヲ十二吋ニ引下クルコト、又潛水艦單艦最大排水量ヲ約千五百噸見當トスルコト可能ナルヘシ但佛國ハ右原則ニ對スル例外トシテ極メテ少數ノ三千噸級ノモノヲ所持シ度シト述ヘタル趣ナリ

右ニヨツテ見レハ英國側ニ於テモ佛國ヲ今次協定ニ參加セシムルカ爲ニハ自國ノ好マサル融通ヲ或程度迄認ムルノ用意アルヤニ觀取セラレタリ

第三節 會議開會後ノ經過

(一) 第三回總會ト制限方式

第三回總會
ニ於ケル
式問題
討論

今次會議ニ於ケル議事進行ノ模様ヲ見ルニ内交渉ヲ以テ其ノ根幹トシ必要ニ應ジ隨時專門家ニ依ル研究ヲ行ハシメタルカ、制限方式ニ付テハ大部分第一委員會及專門委員會ニ於ケル討議ヲ主トシタリ

制限方式カ今次會議ニ於テ初メテ正式ニ議題トナリタルハ一月三十日ノ第三回總會ニシテ佛國側提案ニ係ル總噸數制限ヲ採ルヘキヤ英國側主張ノ艦種別制限ヲ可トスヘキヤ將又右兩者ノ中間ヲ行ク佛國妥協案(融通及艦種決定ノ問題ヲ含ム)ヲ採擇スヘキヤヲ決定スルコト議題ノ一タリシカ米全權「スティムソン」ノ提議ニ基キ英佛兩案研究ノ爲一ノ委員會

英佛兩案
研究委員會
任命

ヲ任命スルコトヲ決シタリ

(註)伊國
提議案比
率決定
及保有
問題

(註)當日議題中ニハ右ノ他伊國提議案ニヨル比率決定及保有量決定ニ問題アリタルモ右ノ如キ重要ナル問題ニ當時直チニ觸ルルコトヲ避クヘシトノ議出テ伊國側ハ其ノ討論延期方ニ同意ヲ表セリ、但伊國側ハ之ト同時ニ右二問題未解決ノ間ハ伊國方假令制限方式又ハ其他特種點ノ討論ニ參與スルトモ右ハ一切一般の留保ノ下ニ爲サルモノナルコトヲ確言シタリ
而シテ伊國及佛國ノ保有量ニ付テハ今次會議ニ於テ何等決定ヲ見サシカ爲制限方式ニ關シテ合意ニ達シタル點モ右伊國ノ一般の留保ノ適用ヲ見送ニ條約中ニ何等ノ規定ヲ見スシテ終リタリ

「ギブソン」主眼

次テ米全權「ギブソン」ハ制限方式論議ノ推移ヲ概説シタル後米國政府ハ建造競争及之ニ隨伴スル誤解猜疑不安等ヲ減少スル上ヨリ之レヲ見テ艦種別制限方式カ從來攻究セラレタル方式中何モノモ優レリト確信スルモノナルモ比較的大ナラサル建造計畫ヲ有スル海軍國ノ特殊ノ必要モ亦無視スルモノニアラサルニ因リ佛國妥協案ヲ討論ノ基礎トスルニ異議ナシト述フ

「アレキサンダー」主眼

英國全權「アレキサンダー」ハ艦種別制限ノ利點ヲ擧ケ日英米三國ハ常ニ本方式ヲ一致支持シ來レル旨ヲ述ヘ次テ艦種分類ニ關シ英國全權ハ一般ニ認メラルル要素即(イ)主力艦(ロ)航空母艦(ハ)巡洋艦(ニ)驅逐艦(ホ)潛水艦トナスヘキモノトシ更ニ右ノ中(ハ)ニ付キテハ之ヲ二分シ口徑六吋ヲ超ユル備砲ヲ搭載スルモノト口徑六吋以下ノ備砲ヲ搭載スルモノトヲ分ツヘク又艦種別制限方式ノ重要點ハ各艦種ニ屬スル單位ノ最大排水量ヲソノ本來ノ性能發揮ニ差支ナキ限度ニ於テ出來得ル限リ小ナル數字ニ限定スルニアリト語リ轉シテ英國政府ハ千九百二十八年九月二十八日附書翰(英佛妥協案ニ對スル米國回答)ニ於テ米國政府カ「如何ナル會議ニ於テモ他國カ其ノ國防ニ最モ適合セルモノト認ムル特殊ノ艦艇ヲ要求スルコトヲ考量スルニ各カナラス從而一國カ其ノ保有噸數ノ範圍内ニテ艦種間ニ噸數ヲ融通」スルコトヲ許容シタルニ倣ヒ「スティムソン」ノ提議ニ係ル委員會ニ佛國妥協案ヲ附議スヘキコトヲ提言スト述ヘ結局右ニ決シタリ

(二) 制限方式ニ關スル我方ノ聲明

制限方式ノ審議ヲ行フヘキ前顯委員會ハ英國側其他ニ於テ出席者人選上ノ困難アリタル爲之カ設置ヲ斷念シ一月二十三

一月三十
日第一
委員會

日第二回總會ニ於テ設置セラレタル第一委員會(原則トシテ各國全權全員出席シ會議事項ヲ處辨スルヲ任務トスルモノ)ニ付託スルコトトシ同委員會ハ一月三十一日午後會合シタリ、當日ハ我方全權全部出席シタルモ制限方式ノ討論ノミヲ行フモノナルニヨリ其後各國夫々二名ノ全權出席スルコトニ一應決定シ我方ヨリハ財部永井兩全權出席スルコトトナリタリ

各國ノ見
解

右決定ノ後各國夫々制限方式ニ關スル見解ヲ述ヘタリ、「アレキサンダー」(英)ハ艦種別制限方式ヲ可トスルモ一定限度ヲ超エサル兵裝ノ艦艇ニ限リ極メテ小率ノ融通ハ之ヲ考量スルニ各ナラスト述ヘ「タルデュー」(佛)ハ佛妥協案ヲ討論ノ基礎トナスヘキコトヲ更メテ提議シ、「シリアニ」(伊)ハ軍縮準備委員會ニ於テ表明シタル如ク伊國ハ終始總噸數制限主義ヲ可トスルモノナルモ討論ノ結果一ノ協定ニ達セムコトヲ希望シ「アダムス」(米)ハ艦種別制限ヲ可トスルモ佛國妥協案ニ付審議ヲナスニ各ナラストセリ、同委員會席上ニ於テ制限方式ニ關シ我方ノ述ヘタル處左ノ如シ

同委員會
ニ於ケル
帝國聲明

「一、制限方式中極端ナル總噸數主義ハ各國ノ整備スヘキ兵力ヲ相互ニ不安定ニ陷ラシムルニ至ルヘク、又極端ナル艦種別主義ハ各國ノ特殊事情ニ適應セシムヘキ兵備ノ伸縮性ニ缺クル處アリ、因テ日本ハ右兩主義ヲ適當ニ調和セムトシ、數種ノ類別ニ付特ニ意ヲ用キタルハ國際聯盟ノ軍備縮少準備委員會及ヒ壽府三國會議ニ於テ日本ノ主張セル處ニヨリ明ナリ、今次ノ會議ニ於テモ日本ハ左記ノ類別ニヨリ各類別毎ニ各國ノ保有シ得ヘキ合計噸數ヲ協定シ且特殊ノ艦ヲ除キ其ノ他ノ類別間ニ若干ノ融通ヲ許容スルヲ適當ト認ム

(一) 主 力 艦

(二) 航 空 母 艦

(三) 八吋砲搭載巡洋艦

(四) 輕巡洋艦(註)驅逐艦

(註)三月十三日帝國全權聲明ニ於テ最大排水量七千噸乃至七千五百噸ヲ提示ス

- (五) 潜水艦
(三) 項ノ「スベシフィケーション」ハ單艦ノ排水量及ヒ備砲口徑ニヨリ定ムルノ見解ナリ
(四) 融通ノ方法
(イ) 主力艦、航空母艦及八吋砲搭載巡洋艦ニハ融通ヲ認メス
(ロ) 輕巡洋艦驅逐艦潛水艦ハ相互ニ融通ヲ認ム

三、融 通 量

彼此融通量ハ各類別ニ對スル各國協定保有量ト不可分ノ關係ニアルヲ以テ之ヲ幾「パーセント」トスルヲ適當トスヘキカハ後日ノ問題トセサルヘカラス

尤モ融通量過大ナル時ハ各類別毎ニ保有量ヲ制限セムトスルノ趣旨ヲ沒却スヘク過少ナルニ於テハ各國ノ需要ニ適セサルモノトナルヘキヲ以テ此ノ間ニ適量ヲ求ムルノ要アリト認ム

- 四、前記類別ノ外特種艦艇ノ如キハ列國海軍ノ勢力ヲ比較スル性質ノモノニ非スニ其ノ國情ニ應スル特種需要ヲ考慮シテ決定セラルヘキモノニ屬スルヲ以テ制限外艦艇ト同様類別ニ加フルノ要ナク別途協定ノ事項トナスヲ適當ト認ム

(註) 其後三月十三日附帝國全權聲明書中ニ於テモ制限方式ニ言及シ總噸數主義艦種別主義ハ何レモ其ノ適用嚴ニ過クハ關係各國間ニ協定ニ達スルヲ得サルヲ以テ日本全權ハ或艦種間ニ融通ヲ認メ兩者ヲ調和スル方式ニ賛成スト述ヘ兩方式間ニ適當ナル調整ヲ行フ必要アルコトヲ宣明シタリ

「マシグリ」ハ前記第二節(二)ニ掲ケタルモノニ輕微ノ修正ヲ加ヘタル佛國妥協案ニ付説明ヲ施シタルカ

右終リテ「マシグリ」(佛)ハ前記第二節(二)ニ掲ケタルモノニ輕微ノ修正ヲ加ヘタル佛國妥協案ニ付説明ヲ施シタルカ何等決定ニ至ラス會議書記局ニ於テ佛國妥協案及他全權部ヨリ提出セラルルコトアルヘキ意見ヲ整理通報ノ上二月四日第一委員會ヲ再開スルコトナリタリ

一月三十一日第一委員會ニ於ケル制限方式ニ關スル我方聲明

一月三十一日第一委員會ニ於ケル我方聲明

I. In the opinion of the Japanese Government, the strict application of the principle of global tonnage as a method of naval limitation tends to lead to an instability of naval strengths to be possessed by the various Powers, whereas the strict application of the category principle would lack in the flexibility and adaptability necessary in arranging naval armaments so as to meet the peculiar needs of the Powers.

The Japanese view that these two methods should be suitably compromised and careful consideration should be given to the classification of warcraft, has already been made clear at the Preparatory Commission for Disarmament of the League of Nations and the Three Power Conference at Geneva in 1927.

We consider it most desirable that an agreement should be reached as to the total tonnage to be held by each Power in each of the categories classified as follows, and as to the amount of transfer between the categories, except in specified classes:—

- (1) Capital ships;
- (2) Aircraft carriers;
- (3) 8-inch gun cruisers;
- (4) Light cruisers and destroyers;
- (5) Submarines.

We propose that the characterization of the ships to be classified as (3) and (4) should be decided by the displacement and gun calibre of individual units.

II. *Method of Transfer.*—(1) To allow no transfer to or from capital ships, aircraft carriers, and 8-inch gun cruisers.

(2) To allow transfer between light cruisers, destroyers, and submarines.

III. *Amount of Transfer.*—The amount of transfer being inseparably related to the agreed holdings of each Power in each category, the question as to what would be the proper percentage of transfer should be left for a later consideration. Our point of view in this connection is that, since an excessive amount of transfer would defeat the pur-

pose of limitation itself, while too small an amount would fail to meet the needs of the respective Powers, it will be necessary to find suitable figures somewhere between those two extremes.

IV. Special vessels, namely those which do not belong to any of the categories above mentioned, are not of such a nature as to be taken into consideration in comparing the naval strengths of the Powers and accordingly their amounts are to be determined in view solely of the special needs of the Powers. In common with the vessels in the exempt class, they should be considered and treated separately and independently.

(三) 制限方式ニ關スル英國側提案

然ルニ二月三日即チ第二回第一委員會開催ノ前日英國側ハ制限方式ニ關スル第一委員會決議案ナルモノヲ同委員會ニ上程ノ目的ヲ以テ各全權部ニ送付越シタリ、其ノ内容左ノ如シ

「 倫敦海軍會議第一委員會

海軍軍備制限方式

決議案（英國提案ニ係ル妥協案ヲ五項ニ要約セルモノ）

委員會ハ

總噸數又ハ艦種類別ニ依ル方式ヲ以テスル海軍軍備ノ制限ニ關シ各全權部ノ提出セル提案ヲ了承シ
佛國全權部ノ提出シタル妥協案ヲ慎重審議シタル後左ノ決議ヲ採擇ス

戰闘用艦艇ノ類別ハ次ノ基礎ニ依リ行ハルモノトス

一、各締約國ハ本條約實施期間中右締約國ノ超エサルヘキ總噸數ヲ指示スヘシ

二、右總噸數ハ各締約國ニ付合意ニヨリ定メラルル基礎ニヨリ左ノ艦種間ニ配分セラルヘシ

(イ) 主力艦

(ロ) 航空母艦

(ハ) 巡洋艦

(一) 口徑六吋ヲ超ユル備砲ヲ有スルモノ

(二) 口徑六吋及六吋ニ達セサル備砲ヲ有スルモノ

(ニ) 驅逐艦

(ホ) 潜水艦（潜水艦存置ノ場合）（註）

三、右ニ掲クル艦種中千九百二十二年ノ華府條約ニ包含セラレサルモノノ最大排水量及備砲口徑左ノ如シ

(ハ) 艦種ノ（一）

口徑六吋ヲ超ユル備砲ヲ有スル巡洋艦

最大排水量一萬噸

最大口徑八吋

(ハ) 艦種ノ（二）

口徑六吋及六吋ニ達セサル備砲ヲ有スル巡洋艦

最大口徑六吋

最大排水量ハ協定ニヨリ之ヲ定ム

(ニ) 艦種

驅逐艦

嚮導驅逐艦ノ最大排水量千八百五十噸

驅逐艦ニ付テハ千五百噸

最大口徑五吋

(千九百二十七年三國海軍會議假決定)

(ホ) 艦種

潛水艦(右ノ存置セラルル場合)(註) 最大排水量千八百噸、最大口徑五吋

(千九百二十七年三國海軍會議假決定)

(註) 英米側ハ潛水艦全廢ヲ主張セルヲ以テ右ノ如キ註釋ヲ付シタルモノナリ

四、前記第二項(ハ)艦種内ニ於テハ今後協定スヘキ割合ニ基キ(ハ)ノ(一)ヨリ(ハ)ノ(二)ニ對スル融通ヲ認ムヘク、右融通ニ關シテハ今後合意ニヨリ定メラルヘキ評定標準ヲ基礎トナスヘキモノトス

五、嚮導驅逐艦ニ關シ千八百五十噸ノ限界受諾ヲ特ニ困難トスル特定ノ歐洲諸國ノ所要ヲ満足セシメムカ爲特別ノ協定ヲ作成スヘシ、右目的ハ(上ヨリ又ハ下ヨリスル)一定割合ノ噸數ノ融通ヲ(ハ)艦種ノ(二)(六吋砲型巡洋艦)及(ニ)艦種(驅逐艦)ノ間ニ認ムルコトニヨリテ達成セラルヘシ、右割合ノ限界ハ各關係國ニ對シ右各艦種噸數ニ付決定ノ定メラルヘキ數字ヲ基礎トシテ考量セラルヘキモノトス

(四) 佛國妥協案ニ對スル各國ノ態度

一、前出ノ通り第三回總會及第一回第一委員會ノ經過ニヨリ制限方式ニ對スル各國ノ態度ハ大體明白トナレリ然レトモ英國側カ二月四日第一委員會ニ於テ艦種別制限ヲ根幹トシツツ然モ尙ホ總噸數制限ヲ可トスル國ノ要求ヲモ考量セル前記決議案ヲ提出シ同案ニ付討議ヲ開始セラレタシト述フルヤ佛國側ハ之ニ異議ヲ唱ヘ佛國側ノ了解ニヨレハ當日各全權部ニ於テ佛國妥協案ニ付意見ヲ述フヘシトノコトナリト主張シ結局佛國妥協案ヲ基礎トシ其ノ各項毎ニ英決議案該當部分ヲ對照シ審議ヲスルコトニ落着セリ

二、各國ノ佛妥協案ニ關スル見解要旨左ノ如シ

「シリアニ」(伊)

「シリアニ」
解ニシテ見

佛國妥協案ニ對スル各國ノ態度
第二回委員會
佛國妥協案ニ對スル各國ノ態度
第二回委員會

「千九百二十七年當時ノ佛國妥協案ハ締約國カ條約失效前ニ到達スヘキ總噸數ヲ揭ケ從テ豫メ自國建造計劃ノ聲明ヲナスヘキ各締約國ハ勢軍縮ノ趣旨ト反スルカ如キ數字ヲ示スヘキ虞アリタリ、然ルニ今次佛國妥協案ハ各國ノ超エサルヘキコトヲ約スル、總噸數ヲ定ムルヲ以テ制限方式ノ基礎トナシ居ル點ニ満足ヲ表ス、但シ右ハ伊國カ佛妥協案ヲ受諾スルコトヲ意味スルニ非ス只其ノ艦種別及總噸數主義二案ヲ折衷シタル努力ヲ多トスルニ止マルモノニシテ現實ナル數字ノ提出ナキ以上制限方式ニ付何等決定ヲナスヲ得ス」

「ギブソン」(米)

「ギブソン」
解ニシテ見

「佛國妥協案ハ初メ四ノ艦種ヲ認メ(第一節(一)參照)タリシカ其後一萬噸以下ノ水上補助艦ヲ一萬噸以下千八百五十噸ニ至ルモノ及千八百五十噸以下六百噸ニ至ルモノ即チ巡洋艦ト驅逐艦トニ分類セリ、今次佛國妥協案ハ只六吋及六吋以下ノ備砲ヲ有スルヤ否ヤノミニヨリ何等其ノ噸數性能ヲ考量セス輕巡洋艦、嚮導驅逐艦及驅逐艦ヲ一括シ居レリ第一回第一委員會ニ於ケル聲明ニ依レハ日本モ亦同シク輕巡洋艦ト驅逐艦トヲ同一艦種中ニ包含セシメ居レリ然レトモ米國政府ハ巡洋艦ト驅逐艦トハ其ノ兵裝、艦齡到達期戰略及策戰上ノ用途ニ差アルヲ以テ英決議案ノ如ク之ヲ區別スルヲ論理的ナリト認ム(但シ米國政府ハ英決議案ノ如ク輕巡洋艦ノ「サブカテゴリ」ニ付備砲口徑以外其ノ最大排水量ニ關スル制限ヲ必要トハ認メ居ラス)

從テ米國全權部カ佛妥協案ヲ討議ノ基礎トシ且同案所載ノ融通ノ原則ヲ以テ合意到達ニ判ルノ捷徑タルヲ認ムルニ同意シタリト雖モ右ハ米國側ノ考量シ居ルモノト異ル艦種類別ノ方法ニ對シ好意的考量ヲ加フルノ謂ニ非ス

右ニ依リ我方及佛國カ輕巡驅逐一括主義ヲ適當トスルニ對シ英米ハ之ヲ截然區別スヘシトセルコト又六吋砲艦ニ付我方及英國カ最大排水量ヲ定ムヘシトセルニ對シ米カ之ニ反對ノ意向ヲ有スルモノナルコト明白トナレリ、次テ委員會ハ英決議案ヲ對照シツツ佛妥協案ノ逐項審議ヲ開始シタルカ英決議案第二項「右總噸數ハ各締約國ニ付合意ニヨリ定メラル基礎ニヨリ左ノ艦種間ニ配分セラルヘシ」ノ「合意ニヨリ定メラル基礎」(on an agreed basis)ナル字句

日佛對英
米ノ意見
佛國妥協案ノ逐條
審議

「マシグ
リ」ハ佛
國妥協案
ヲ極メテ
嚴格ニ解
釋スルト
キハ一度
各國保有
總噸數決
定ノ上ハ
其ノ艦種
間ヘノ配
分ノ如キ
ハ全ク各
國ノ自由
ニ委セラル
ヘキコト
ナルモノ
ニテ英佛
兩案ノ根
本的差異
モ實ニ茲
ニ存ス、他
方實施期
間長期ニ
互ル壽府
一般軍縮
協定ノ準
備タルヘ
キ協定ナ
ルニ於テ
ハ配分ノ
自由ヲ考
量スルコ
ト緊要ナ
ルヘキモ
今後數年
間ノ建造
計劃ニ適
用セラル
ヘキ實際
的協定ノ
作成ニ當
リテハ事
實上多々
存スヘキ
ニ付之ヲ
首席全權
ノ議ニ移
シ度シト
述ヘ其ノ
通決定シ
タリ

二月五日
會
議
全
權
提
案

二月六日
會
議
全
權
提
案

ハ艦種ニ關スルモノナリヤ將又配分ニ關スルモノナリヤ換言スレハ一度保有量決定ノ上ハ右保有量ノ艦種間ヘノ配分ニ付豫メ協定ヲ要スルヤ將又各國ハ自主的ニ配分ヲ爲シ得ルノ意ナリヤト「マシグリ」(佛)ヨリ質セルニ對シ「アレキサンダー」(英)ハ配分ニ關スル合意ノ意味ナリト答ヘタリ

「マシグリ」(佛)ハ佛國妥協案ヲ極メテ嚴格ニ解釋スルトキハ一度各國保有總噸數決定ノ上ハ其ノ艦種間ヘノ配分ノ如キハ全ク各國ノ自由ニ委セラルヘキコトナルモノニテ英佛兩案ノ根本的差異モ實ニ茲ニ存ス、他方實施期間長期ニ互ル壽府一般軍縮協定ノ準備タルヘキ協定ナルニ於テハ配分ノ自由ヲ考量スルコト緊要ナルヘキモ今後數年間ノ建造計劃ニ適用セラルヘキ實際的協定ノ作成ニ當リテハ事ノ英決議案ノ趣旨ヲ適切トスヘシ而シテ右兩案ヲ調和シ得ヘキ實際的方法ノ如キハ事實上多々存スヘキニ付之ヲ首席全權ノ議ニ移シ度シト述ヘ其ノ通決定シタリ

三、翌二月五日午後首席全權會議ニ於テ右ノ點ニ關シ「ステイムソン」(米)ハ第一委員會ヨリ首席全權會議ニ移牒シ來レル艦種別制限方式ト總噸數制限方式ヲ調和スヘキ實際的方法ノ探求ハ此ノ際首席全權會議ノ議事ヲ繁雜ナラシムルモノナルノミナラス其後融通問題其他制限方式一般ニ關スル「クレイギー」(英)「マシグリ」(佛)間ノ私的會談ニヨレハ前顯「on an agreed basis」ナル語ヲ「after an exchange of views」ト改ムルコトニテ折合フ形勢ニアルヤニ聞キ及ヘルヲ以テ之ヲ再ヒ第一委員會ニ廻付スヘシトシ異議ナク右ニ可決セラレタリ、因テ二月六日第一委員會ハ佛國妥協案中公表方法ノ項(第二節(二)參照)ニ關スル討議ヲ再開シタリ

「マシグリ」ハ佛國妥協案ノ趣旨ハ必シモ艦種間ノ分配ニ付キ豫メ協定ヲ遂クルコトヲ排スルニ非ス各國間ニ意見ノ交換ヲ爲シタル後配分ヲ行フノ趣旨ナリト述ヘ結局各國ハ意見交換ノ後ニ噸數ヲ配分スト「フォーミラ」ヲ一ノ專門委員會ニ付議スルコトニ合意ヲ見タリ

惟フニ右ハ「ギブソン」(米)モ當時述ヘタルカ如ク「合意ニヨリ定メラレタル基礎ニヨリ」ト云フモ「意見交換ノ後」ニ制當噸ヲ定ムルト云フモ結局同一ニシテ只表現ノ差ニ過キス全ク總噸數主義ヲ唱ヘ來レル佛國側ノ面目ヲ立ツル爲

ノ「フォーミラ」ニ過キスト云フハシ

四、艦種類別ノ問題ニ關シ輕巡洋艦及驅逐艦ヲ一括スヘキヤ否ヤニ付議岐レタルカ二月六日第一委員會ノ席上「アレキサンダー」(英)ヨリ右ニ關シテハ日英米及佛伊ノ二欄ヲ設ケ前者ニ付テハ輕巡洋艦ト驅逐艦ヲ區別シ後者ニ付テハ之ヲ一括スヘキ「フォーミラ」作成ヲ佛妥協案第二附屬表ト關聯研究スヘキコトヲ前記專門委員會ヘ命スヘキコトヲ申出テ右ニ決セリ

(イ) 前記專門委員會ハ二月七日、八日及十日前後三回會合ヲ重ネタル結果「合意ニヨリ定メラルル基礎」云々ノ語ノ修正ニ關シテハ第一委員會ヨリ廻付シ來レル左記原案ヲ其儘可決シタリ

“That each Power represented at the present Conference shall indicate, after an exchange of views with the other Powers, how it will allocate its tonnage.”

“Chaque Puissance représentée à la présente Conférence indiquera, après un échange de vues avec les autres Puissances, comment elle entend répartir son chiffre global.”

(ロ) 艦種間分配ノ表ニ關シテハ佛國提案ニ係ル表ニ英國側ノ修正ヲ加ヘ且右表ニ關スル左ノ如キ各國ノ意見ヲ付シテ可決セラレタリ

艦種類別
ニ關スル
「フォーミ
ラ」作成

專門委員
會ニ於テ
合意ケル
メヲリ云
ルヲ修正
案可決

專門委員
會ニ於テ
合意ケル
メヲリ云
ルヲ修正
案可決

艦	種	英帝國	合衆國	日本	佛國	伊國	X	Y
甲、主	力艦							
乙、航	空母艦							
丙、巡洋艦	(イ) 一五五噸以上ノ口徑ノ砲ヲ有スルモノ (ロ) 一五五噸以下ノ口徑ノ砲ヲ有スルモノ							
丁、驅逐艦								
戊、潛水艦								

同委員會
全會一致
ノ意見

見各國ノ意
米國

佛國
英國

甲、專門委員會全會一致ノ意見
巡洋艦「サブカテゴリー」タル六吋砲艦ノ最大並最小排水量及驅逐艦最大排水量ノ問題ハ第一委員會又ハ首席全權ニ保留スヘシ
乙、各國ノ意見

合衆國

(イ) 一五五噸(六吋)砲巡洋艦ニ關スル最大排水量ヲ示ス數字ハ本艦種類別中ニ掲クル必要ナシ、本問題ハ甲記載ノ如ク第一委員會又ハ首席全權ニ保留セラレアルヲ以テ六吋砲巡洋艦單艦最大排水量縮小ノ問題モ亦保留セラレサルヘカラス

(ロ) 融通率ハ佛國妥協案附屬第二表(各國ノ艦種間噸數分配ノ表)ノ下方ニ掲クルヲ可ト認ム
(ハ) 今後ノ協定ニヨリ定メラルヘキ右融通率ハ前記第二表ニ掲クヘキ各噸數ト必然的ニ關聯スルモノナルコトヲ宣明ス

佛國

融通率ヲ第二表ノ下方ニ掲クルニ異議ナキモ融通ニ關スル一般の規定ハ條約自身中ニ包含セララルヘキヲ要ス

英國

(イ) 佛國妥協案第二表ニ掲クル艦種類別ノ限界ハ單ニ備砲ノ口徑ニ依レルモ之ト同時ニ排水量ヲ考量スヘキモノタルヲ信ス
(ロ) 各締約國ニ於テ自國ノ建造セムトスル二〇三耗(八吋)砲艦ノ隻數ヲ指示スルコト重要ナリト認ム
(ハ) 一五五耗(六吋)砲艦ノ最大排水量ハ巡洋艦ニ付華府條約ニ定メラレタル數字ニ比例シ縮小セラレムコトヲ希望ス

(ニ) 第二表ニ掲ケラルル驅逐艦艦種ニ付左ノ趣旨ヲ附加セムコトヲ希望ス

「驅逐艦艦種ニ付數字ヲ示スヘキ締約國ハ嚮導驅逐艦ノ爲ニ其ノ、割以上ヲ使用セサルコトヲ約ス」

(合衆國全權部ハ右見解ヲ支持スルモ之ヲ第二表ノ註トセムコトヲ希望セリ)

(ホ) 英本國ハ最終的ニ關係國カ各艦種ニ付分配ヲ決定スヘキ噸數ヲ留保シ右第二表ヲ受諾ス

(ヘ) 上ヨリ下ヘスル融通ハ今後決定セララルヘキ割合ヲ以テ二〇三耗(八吋)及一五五耗(六吋)砲艦ノ間ニ許容セラ

ルヘキモノナルコト及驅逐艦ト一五五耗(六吋)砲艦トノ間ニハ一定割合率ノ融通ヲ受諾スル用意アルコトヲ宣明ス但シ右以外他ノ如何ナル融通ニモ反對ナリ

帝國

我方ノ意見左ノ如シ

(イ) 關係國ヲ二群ニ分ツカ如キ制限ノ方式ヲ拾テ一切ノ關係國ニ適用セララルヘキ制限方式ノ設定ニ全力ヲ盡スコトヲ肝要ナリ

(ロ) 融通ヲ認ムルコトヲ條件トシテ輕巡洋艦ト驅逐艦トノ分類ヲ受諾スルノ用意アリ、右融通率ハ今後ノ決定ニ依ル

(本點ニ關シ合衆國及英本國ハ同意ナリ)

(ハ) 一五五耗(六吋)砲巡洋艦ノ最大及最小排水量ヲ重視ス、最大噸數ハ七千噸乃至七千五百噸最小噸數ハ二千五百噸トスルコトヲ試ミニ提案ス

制限方式
ノ議事進
歩ノ第一
三月十三
日第一委
員會

- (二) 日本全權部ハ英本國全權部ノ意見 (イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ) ニ同意ナリ
制限方式ノ議事完成ニ近付ク

二月十三日會合ノ第一委員會ハ前記艦種間分配表附記ノ各國意見ニ付審議ヲ行ヒタルカ融通問題及ヒ佛國妥協案カ艦種
類別ニ當リ備砲口徑ノミヲ考量セルモ右以外ニ排水量ノ制限ヲモ掲クヘシトノ問題ニ付議論ヲ生シ紛糾ヲ來シタルヲ以
テ各國ヨリ夫々一名ノ専門家ヲ出シ同日ノ委員會ニテ議經リタル點ヲ蒐錄報告スルコトシタリ

然ルニ右専門委員會作成ノ報告ハ特ニ第一委員會ノ承認ニ付スルコトナク其ノ儘首席全權會議ニ提出セラレタル爲、會
議事務總長ニ於テ調製セル第一委員會事業現狀ト共ニ三月七日ノ首席全權會議ノ議題トナリタリ

制限方式關係事項ニシテ同日ノ首席會合ニテ決定セラレタルモノ左ノ如シ

同會議決
定事項

- (イ) 總噸數制限方式ト艦種別制限方式ヲ調和スル「フォーミュラ」ハ第一委員會決定通り其儘採擇(第三節(四)ノ(ロ)参照)
(ロ) 噸數配分表(佛國妥協案附屬第二表ニ英側ノ修正ヲ加ヘタルモノ)ハ各國ノ意見ヲ付シタルママニテ承認
(ハ) 融通及融通前豫告ノ原則

- (ニ) 日英米三國ニ限り驅逐艦割當噸數範圍内ニ於ケル嚮導驅逐艦建造率ヲ限定スルノ主義(但我方ヨリ右ハ單ニ將來ニ
關スルモノナリトノ留保ヲ付シタリ)

(註) 右(イ)(ロ)(ハ)及(ニ)ハ何レモ既ニ第一委員會ノ議ヲ經タルモノナリ

右ノ外第一委員會ヨリ首席全權會議ニ廻付シ來レル左記二問ハ再ヒ第一委員會ニ返付スルコトトシタリ

- (イ) 六吋(一五五耗)砲艦ニ付最大並最小排水量ヲ定ムルコト及驅逐艦ノ最大排水量ヲ定ムルコト適當ナリヤ否ヤノ問
題

- (ロ) 艦種類別ニ當リ備砲口徑ノ外排水量ヲモ考慮ニ入ルヘキヤノ問題
右三月七日首席全權會合ノ機會ヲ利用シ若槻全權ハ

不慮違背
問題

(若槻全
權聲明)

(イ) ニ關シ我方ハ六吋砲巡洋艦最大噸數七千噸乃至七千五百噸最小二千五百噸嚮導驅逐艦二千五百噸乃至千五百噸驅逐
艦最大千五百噸ヲ主張ス但壽府專門家假協定通嚮導驅逐艦ノ最大噸數ヲ千八百五十噸ト定ムル場合ニ於テハ輕巡洋艦
ノ名ヲ藉リ千八百五十噸乃至二千五百噸ノ大型驅逐艦ヲ建造スルコトヲ防止スル趣旨ヨリ右千八百五十噸乃至二千五
百噸ヲ不建造帶トシ度シト述ヘタリ本問題ハ前記(ロ)ト共ニ三月十一日ノ第一委員會ニテ討議セラレタルモ英米共ニ
之ニ承服セス其ノ後四月二日ノ首席會合ニテ若槻全權ハ他ニ重要ナル問題モアリトテ不建造帶主張ヲ撤回シ次テ四月
十四日第五回總會ニ於テ右撤回ヲ確認シタリ

斯クテ驅逐艦最大噸數ハ千八百五十噸、備砲口徑最大五吋タルコト驅逐艦割當噸數中一割六分ハ千五百噸ヲ超エ千八
百五十噸ニ至ルモノ即嚮導驅逐艦ノ建造ニ充テ得ルコトノ二點ハ本條約第三編第十五條及第十六條第四號ニ夫々規定
ヲ見ルニ至レリ

排水量併
記ニ關ス
ル問題

(ロ) 即艦種類別ノ決定ニ當リ備砲口徑以外ニ排水量ノ制限ヲ置クヘキヤニ付テハ英國側ハ兩者ヲ考量スル方建造競争阻
止ノ效アルノミナラス既ニ華府條約ハ主力艦、航空母艦並ニ他ノ一切ノ水上艦艇ニ付テモ口徑及排水量共ニ之ヲ考量
シタルヲ以テ右原則ヲ水上補助艦々種類別ニモ擴張スルコト論理的ナリト述ヘ我方之ヲ支持シタルカ米國側ハ艦種ニ
付右二者ヲ考量スルニ反對ナキモ艦種内ノ「サブ、カテゴリー」ニ之ヲ適用スルニハ同意シ難シト述ヘ間接ニ同國從來
ノ主張タル六吋砲最大排水量設定反對ヲ示シタリ

最後ニ同シク第一委員會ヨリ首席會議ニ廻付シ來レル問題タル

- (ハ) 八吋砲巡洋艦隻數制限ノ問題

- (ニ) 八吋砲巡洋艦ヨリ六吋砲巡洋艦ヘノ融通及驅逐艦ト六吋砲巡洋艦トノ間ノ融通

ハ各國保有量トノ關係アルヲ以テ右決定迄之ヲ留保スルコトトナシタルカ其後何レモ解決セラレ前者ハ條約第三編第
十六條第三項ニ規定セラレ日英米最大隻數ヲ夫々十二、十五、十八ト定メ、後者中八吋砲巡洋艦ヨリ六吋砲巡洋艦ヘ

八吋砲巡
洋艦及六
吋砲巡洋
艦ノ問題

スル融通ニ付テハ何等合意ヲ見サリシモ驅逐艦ト六吋砲巡洋艦トノ間ノ融通ニ關シテハ第三編第十七條ニ規定ヲ設ケ其ノ融通率ヲ一割ト定メタリ

制限方式ト條約トノ關係

(六)

制限方式ハ初メ條約案第二編トシテ規定セラルル豫定ニシテ其案文ハ制限方式カ佛國妥協案ヲ討議ノ基礎トセル事情ニモ鑑ミ佛國側ニテ起草ノ筈ナリシ處伊國ハ佛伊兩國間ノ保有量ニ付何等合意成立セサリシカ爲制限方式ニモ一般的留保ヲ主張シ(第三節ノ(一)ノ(註參照)遂ニ條約中ヨリ制限方式ニ關スル部分ヲ除クコトヲ強硬ニ要求シタルニ因リ之ヲ條約中ニ掲ケサルコトトシ右方式ニ關シ合意ヲ見タル點ハ別記會議々長タル英首相書翰ヲ以テ國際聯盟ニ通報シ軍縮準備委員會ノ參考ニ供スルニ止メ其旨四月二十二日最終總會ノ席上同首相ヨリ披露アリタリ

右ノ如キ事情ニテ制限方式ニ關シ整備セル規定ハ今次條約中ニ之ヲ缺クモ然モ尙制限方式ニ關スル規定ハ諸處ニ存スルヲ見ル

今其ノ重ナルモノヲ摘出スレハ左ノ如シ

艦型ノ制

(4)

艦型備砲ノ制限
第四條及第五條(一萬噸以下ノ航空母艦ノ備砲ノ制限)

第七條(潛水艦單艦排水量及備砲ノ制限)

第八條(制限外艦船ノ規格)

第十五條(巡洋艦々種及驅逐艦々種ノ定義)

艦齡

(ロ)

艦齡
第二編第一附屬書(巡洋艦驅逐艦及潛水艦々齡ヲ定ム)

隻數制限

(ハ)

隻數制限

融通其他

第十六條ノ三(八吋砲巡洋艦隻數ヲ制限)
(二) 融通其他

第十七條(六吋砲巡洋艦ト驅逐艦トノ間ノ融通)

第十六條ノ四(嚮導驅逐艦建造割合)

第十六條ノ五(航空機著艦用ノ臺又ハ甲板ヲ裝置シ得ル巡洋艦割當噸數ノ割合)

倫敦海軍會議々長發國際聯盟事務總長宛書翰

倫敦海軍會議々長發國際聯盟事務總長宛書翰

Sir,

21st April, 1930.

In its resolution voted on the 24th September last, the Assembly of the League of Nations cordially welcomed "the prospect of an early agreement between the naval Powers with a view to the reduction and limitation of naval armaments, which agreement may enable the Preparatory Commission to secure general agreement on the methods to be adopted for the reduction and limitation of naval armaments."

As regards those armaments, the work of the Preparatory Commission was checked by the difference of opinion on the methods of limitation, which arose between various delegations, two opposing proposals being incorporated in draft conventions submitted by the French and United Kingdom delegations respectively. The attempts to reach a compromise between the two drafts at the session of the Preparatory Commission in April, 1927, and at subsequent negotiations, remained in the end without result.

I am glad to inform you that at the Conference which has just ended the British and French Delegations had the satisfaction of reaching agreement to adopt a common method of limitation, and I invite your attention to the First Report of the First Committee which contains full particulars, together with the suggested method of indicating naval strengths in tabular form.

On account of the reservations which certain delegations attached to their acceptance of the report, and which are shown in the Report of the First Committee, the London Conference considered that it should limit itself to taking

111111

note of that paper, without actually accepting it. You will observe that the Italian Delegation entered a general reservation which is on record.

As far as three of the High Contracting Parties to the London Naval Treaty are concerned, the agreement, which they have arrived at on the question of tonnage, has been so drawn up as to make it consistent with the scheme of limitation referred to in the First Committee's Report.

Part II of the London Naval Treaty records, on the other hand, the agreement arrived at by all the High Contracting Parties represented at the Conference on the question of the limitation of the displacement of submarines, and the calibre of the guns mounted, the definition of the vessels to which the rules for limitation do not apply, rules for replacement and scrapping, and finally a list of vessels, which, while not conforming to the characteristics of exempt vessels, should not be included when determining total tonnage.

Thus the London Naval Conference represents an advance made on the results heretofore achieved in this particular field. It is our earnest hope that the Preparatory Commission will find in the results of our work a contribution which will have the effects of facilitating its future labours.

In expressing this hope, I beg to forward to you, together with the text of the London Treaty, the Minutes of the Plenary sittings and the Reports of the Conference Committees, and I would ask you kindly to communicate them to the Chairman and to the Members of the Preparatory Commission.

I am, Sir,

Your obedient Servant,

(Sd.) J. RAMSAY MACDONALD

第四節 融 通 問 題

(一) 融通問題ニ關スル「マシグリ」「クレギー」内談

融通問題ニ關シテハ一月二十二日ノ英佛全權會談ノ結果ニ基キ佛國妥協案説明ノ趣旨ヨリ同問題ニモ言及スルコトトシ先ツ佛國全權代理「マシグリ」及英國外務省米國局長「クレギー」トノ間ニ意見交換ヲ行ハシムルコトトシタリ

「マシグリ」
「クレギー」
内談

一月二十
二日會談

右兩名ハ數次ニ互リ會談シタルカ一月二十二日午後ノ會談ニ於テ「マシグリ」ハ主力艦ニ付テハ華盛頓條約ノ關係上融通ノ問題ヲ生スルコトナク又佛國側ニ於テハ八吋砲巡洋艦及潛水艦ノ爲ニスル融通モ右二艦種ニ付佛國ニ満足ナル協定ヲ得ル場合之ヲ要求スル意向ナシ、但シ航空母艦ニ付テハ輕小ノ融通ヲ求メ度キ意向ナリト融通問題ニ關スル佛國側希望ヲ述ヘタリ

右ニ對シ「クレギー」ハ英國側トシテハ融通ヲ伴フ制限方式ヲ以テ不確定及不安ノ念ヲ惹起シ各國相互ノ間ニ其ノ意向ニ付疑惑ヲ懷カシムルモノナリトシ居ルモ佛國側カ九百二十七年當時ノ妥協案カ僅カニ主力艦航空母艦一萬噸以下ノ水上補助艦及潛水艦ノ四艦種ヲ認メタルニ過キサリシヲ今次妥協案ニ於テハ一萬噸以下ノ水上補助艦ヲ六吋ヲ超ユル備砲ヲ有スルモノト六吋以下ノ備砲ヲ有スルモノトニ分チ結局艦種ノ數ヲ増シ七トナセルハ右輕巡洋艦中ニ驅逐艦ヲ包含セシメタル點並ニ特殊艦艇ヲ一ノ艦種トナシタル點ニ於テ英國側ト見解ヲ異ニスルモ嚴格ナル艦種別制限方式ヲ可トスル英國側意向ニ接近シタルモノトシテ其ノ協調的態度ヲ多トシ一定範圍ノ融通ニハ反對セサルヘシ即最強ノ艦種タル主力艦、航空母艦口徑六吋ヲ超ユル備砲ヲ有スル巡洋艦ニ關シテハ絕對ニ融通ヲ認メサルコトトスルモ右ニ比シ強力ナラサル艦艇ニ付テハ少量ノ融通ヲ認ムル用意アリ(註)尤モ右ノ如キ融通カ實際上起ラサルコトヲ英國側ノ希望スルハ言ヲ俟タスト答ヘタリ

(註)二月
十日附
英國政
府白書

(註)二月十日英國政府カ同國議會ニ提出セル覺書中ニ於テモ融通問題ニ言及シ主力艦航空母艦潛水艦ニ付テハ融通ヲ認メサルモ八吋砲巡洋艦ヨリ六吋砲巡洋艦ヘハ今後合意ニヨリ定ムヘキ一定率ノ融通ヲ認ムルノ用意アリ但右融通ニハ同シク合意ニヨリテ定ムヘキ評定標準 (evaluating factor) ナ適用スヘシトセリ

(二) 融通問題ニ關スル日英米交渉

日英米交
渉(融通問
題主として
承認)

一月二十九日英全權「マクドナルド」ハ其ノ後ノ英佛會談ノ内容ヲ若槻全權ニ通報シタルカ其際融通問題ニ關シテハ主力艦及八吋砲巡洋艦ニ關シ融通ヲ認メサルコトニ合意ナリタリ、只佛國ハ「マルセーユ」「アルジェ」間連絡其他地中海ニ於ケル必要上三千噸五吋砲ナル特種艦型ヲ有スルヨリ輕巡洋艦ト驅逐艦トヲ一括シ度ク之ヲ二艦種ニ分ツトキハ十

割ノ融通ヲ必要トストセリ、右佛國側立場ニ付テハ英國側トシテハ好意の考慮ヲ加フル所存ナリト語レリ
右ノ如ク融通問題ニ關シテハ英佛雙方共ニ或ル程度ノ互讓の態度ヲ示シタル爲二月十九日附第一委員會第一報告モ融通カ
主義上承認セラレタルコト但其ノ最終の決定ハ一ニ各國保有量決定如何ニ俟ツモノナル旨ヲ記載スルニ至レリ
然レトモ今次會議ニ於テ保有量ノ決定ヲ見タルハ日英米三國ニ限リ佛伊二國ニ關シテハ其ノコトナカリシ爲融通問題ハ右
二國ニ關シテハ何等實益ナキニ至リ出來得ヘクムハ之ヲ排除セムトスル英米側ト或範圍ノ融通ヲ認メシメムトスル我方(註)
トノ間ニ專ラ會議後期ニ於テ論議セラルルニ至レリ

(註) 第五章第三節(二) 參照

日英米間ノ輕巡洋艦及驅逐艦ヨリ潛水艦ヘノ融通問題ハ之ヲ本報告第十三章第二節ニ讓リ茲ニ輕巡洋艦及驅逐艦相互間ノ
融通問題ノ經緯ヲ揭クレハ左ノ如シ

一、英米側ハ何レモ輕巡洋艦ト驅逐艦トヲ區別シ之ヲ二艦種トセムコトヲ主張シ居リシモ我方ハ輕巡洋艦ト驅逐艦トノ間
ニハ米國側ノ強調スル如ク截然タル性質ノ差アルニ非ス其ノ差ハ寧ろ程度ノ差ナルニ過キサルヲ以テ之ヲ一括制限スル
ヲ可ト認メ若槻全權ハ前記一月二十九日ノ會談ニ於テ其旨英國側ニ通シタリ、其際同全權ハ右我方見解ハ日本側トシテ
ハ必スシモ固持スル次第ニハ非サルモ輕巡洋艦驅逐艦ヲ二艦種トスル場合ニハ兩者ノ間ニ若干ノ融通ヲ必要トスル旨ヲ
明ニシ置キタリ

二、輕巡洋艦ト驅逐艦トノ問題ニ關シテハ其後二月六日ノ第二回第一委員會ニテ種々議論ヲ重ネタルカ「アレキサンダー」
(英)ヨリ妥協的解決策トシテ右ニ關シテハ二欄ヲ設クルコトトシ終始艦種別制限方式ヲ支持シ且壽府三國會議ニ依リ相
互ニ其ノ意向ヲ知レル日英米ニ付テハ輕巡洋艦ト驅逐艦トヲ區別シ佛伊ニ付テハ之ヲ區別セス一括スルコト、但シ右ニ
關スル最終の決定ハ各國保有量ニ付合意ニ達シタルトキ之ヲ行フヘシトセリ
因テ第一委員會ハ一ノ專門委員會ヲ設ケ右「アレキサンダー」提案ノ次第ヲ審議セシムルコトトシタリ

二月十三日
第一委員會

二月十三日ノ第四回第一委員會ハ右專門委員會報告審議ノ爲開催セラレタリ

前記ノ如ク英米側ニ於テハ融通ヲ喜ハサルモノナルモ同委員會ニ於テハ我方及佛國ト共ニ融通及融通ヲ行フ場合ニ於ケ
ル豫告ヲ主義上承認シ其ノ詳細及最終の決定ハ之ヲ各國保有量審議ノ際迄之ヲ俟ツコトトシタリ右決定カ二月十九日附
第一委員會第一報告中ニ記載セラレタルハ前記(二) 記載ノ通ナリ

尙同日ノ第一委員會ニ於テ我方ハ六時砲巡洋艦ト驅逐艦トノ區別ノ問題ニ關シ右二艦種間ニ相互ヨリ融通ヲ認ムルコト
ヲ條件トシテ之ヲ承認シ英米側ハ右我方ノ申出ヲ受諾シタリ、而シテ其ノ融通量ノ決定ハ後日ニ讓ルヘキモノトセリ

四月十二日
第一委員會

三、其後我方ハ右融通量決定方ヲ第一委員會ニ提議スヘキ旨ヲ英米側ニ通シ置キタルカ日英米三國保有量ニ付大體合意ニ
達セル後ヲ承ケタル四月十二日ノ第一委員會ニ於テ右問題ニ言及シタリ、財部全權ハ日本ハ當初ヨリ六時砲巡洋艦ト驅
逐艦トヲ同一艦種中ニ包含セシメムコトヲ欲セシモ相互ノ間ニ融通ヲ行ヒ得ルヲ條件トシテ之ヲ二艦種トスルニ同意ヲ
表シ既ニ第一委員會ノ決定ヲ經タリ(註) 而シテ融通量ハ各國保有量決定後ニ讓ルコトトナリ居リタルヲ以テ今日之ヲ一
割五分ニセムコトヲ提議スト述ヘタリ

然ルニ右ニ對シ先ヅ加奈院、濱洲、新西蘭反對シ米全權「スティムソン」モ我方要求ニ同意スルヲ得スト述ヘタリ

「アレキサンダー」(英)ハ驅逐艦輕巡洋艦間ノ融通ハ其ノ融通率カ大ナラサル場合ニハ必シモ反對セサルヘキモ出來得
ヘクムハ融通ヲ認ムルコトナク之ヲ二艦種ニ分チタキコト切望ニ堪ヘスト述ヘ「スティムソン」モ財部提督ノ所述カ融通
問題ニ關スル同提督ノ態度ヲ明ニスルニアルニ於テハ充分其ノ目的ヲ達シタルモノナルニヨリ融通問題ハ之ヲ撤回セラ
レタク又融通問題ニ觸ルルコトナク日英米三國保有量ノ決定ヲ見タル今日同問題ノ提起ヲ見ルハ了解ニ苦シム處ナリト
述ヘタリ

於茲我方ハ前記第一委員會ノ決定ノ經緯ヲ説述シ「スティムソン」ノ誤解ヲ正スニ努メタルモ議纏ラス、因テ議ヲ日米首
席全權間ニ移スコトトシタリ

(註) 本節(二)ニ参照

四月十四日
若槻
日英
會議
決定
通過
議決

四、右ニ基キ四月十四日若槻全權ハ「スティムソン」ヲ往訪シ輕巡洋艦ト驅逐艦トノ間ノ融通ハ既ニ第一委員會ニ於テ主議上決定ヲ見タル處ナルノミナラス其ノ他ノ機會ニ於テモ(註)之ニ關スル我方意向ヲ表明シ置キタル處ニシテ帝國海軍側ニ於テモ右融通ハ可能ナルモノト了解シ居レリト述ヘ「スティムソン」ノ好意的考慮ヲ促セリ

右ニ對シ「スティムソン」ハ同問題ニ關シ其ノ後他ノ米國全權及英國側ト協議ヲ重ネタルカ財部全權ノ要求タル一割五分ハ高キニ過クルヲ以テ一萬噸見當ニ止メムコトヲ希望スト答ヘタリ

因テ若槻全權ハ右ハ一割位ナリヤト尋ネタル處同席セル「リード」全權ハ一割ノ融通權ヲ日英米三國共保有スルコトトスル趣旨ナリト説明シ尙若槻全權ヨリ輕巡洋艦、驅逐艦何レノ一割トナスヘキヤト協議セルニ對シ米兩全權ハ日米ニ關スル限り何レヲトルモ略々同噸數トナルモ英國側ノ希望モアルニ付融通ヲ受クヘキ艦種ノ一割ニ決定致シ度シト述ヘ若槻全權ハ之ヲ承諾シタリ

右ハ今次條約第十七條ニ規定セラレタリ

(註) 本節(二)冒頭若槻全權ト「マクドナルド」トノ會談ノ部分參照

第五章附屬書

所謂英佛妥協案ニ關スル在京英國代理大使宛帝國政府回答

英佛妥協案ニ對スル
兩國代表
英佛兩國
大使宛
回答文

以書翰啓上致候陳者八月二日附書翰ヲ以テ英佛兩國政府ハ兩國間ニ於ケル豫備交渉ノ結果千九百二十七年三月國際聯盟軍縮委員會ニ於ケル兩國各自ノ主張ヲ實質的ニ變更スルコトニ合意シ左ノ提案ヲ作成シタル旨竝右ハ兩國政府ニ於テ受諾ノ用意アルモノニシテ且一般協定促進ニ資センコトヲ希望スル旨帝國政府ヘ通報セラルルト共ニ本提案ニ對スル帝國政府ノ意見御問合相成敬承致候

一、軍備縮少會議ノ決定スヘキ制限ハ四種ノ軍艦ニ關スルモノトス

(1) 主力艦即排水量一萬噸ヲ超ユル又ハ口徑八吋ヲ超ユル備砲ヲ有スル艦船

(2) 一萬噸ヲ超ユル航空母艦

(3) 一萬噸以下ノ水上艦船ニシテ口徑六吋ヲ超エ八吋ニ至ル備砲ヲ有スルモノ

(4) 大洋用潛水艦即六百噸ヲ超ユル潛水艦

二、華盛頓會議ハ(1)及(2)艦種艦船ノ制限ヲ規定セルヲ以テ軍備縮少會議ハ單ニ右制限ヲ同條約非署名國ニ擴張スル方法ヲ

審議スヘシ

三、英國政府及佛國政府ハ左ノ如ク提案ス

(1) (3)及(4)艦種ニ關シ軍備縮少最終會議ハ一切ノ國ニ適用セラレ何レノ國モ右艦種毎ニ艦船ノ全部ニ付條約期間中超過スルコトヲ許容セラレサル最大限噸數ヲ定ムヘシ

(2) 右艦種制限ニ關スル最終會議ニ於テ各國ハ前項ノ制限内ニ於テ其ノ到達セムトシ且條約期間中超過セサルコトヲ約スル噸數ヲ表示スヘシ

公正ナル軍縮協定ノ成立ニ對シ眞摯ノ努力ヲ惜マサルハ帝國政府ノ終始一貫セル方針ナル處今般英佛兩國協定ニ係ル海軍軍備制限方式ハ從來各種提案ノ間ニ存在セル合理性ト實行可能性トノ杆格ヲ良ク調和シ得タルモノニシテ帝國政府ハ本協定ノ趣旨ニ賛意ヲ表シ候

然レトモ各國ニ一律ニ適用スヘキ大型巡洋艦及潛水艦ノ最大限噸數ハ國民負擔ノ輕減ト國ノ安全ノ兩見地ヨリ事情ヲ異ニスル各國ヲ満足セシムルモノタラサル可カラサルヲ以テ之カ協定ハ最モ慎重公正ナルヲ要スルモノト認メ候
右回答申進旁本大臣ハ茲ニ重ネテ貴下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和三年九月七日

外務大臣 男爵 田 中 義 一

大不列顛臨時代理大使

「セシル、ドーマー」 貴下

第六章 制限外艦船

制限外艦
船問題
審議通過

一、制限外艦船ニ對スル審議ハ二月六日第三回第一委員會ニ於テ之ヲ特殊艦船問題ト共ニ專門委員會ニ付託シ同委員會ハ二月十三日、十四日ノ第四回及第五回會合ニ於テ略之カ審議ヲ完了シ三月七日第一委員會四月十四日總會ニ於テ夫々右專門委員會決定ヲ採擇セリ

專門委員
會ニ於テ
大勢

二、右專門委員會ニ於ケル大勢ハ壽府三國會議假協定ヲ支持シ之ニ對シ我方ヨリハ六百噸ヲ超ヘ二千噸ヲ超エサル戰闘用艦艇及非戰闘用艦船（壽府假協定（B）級及（C）級後述三參照）ヲ一括合併セル案ヲ提議シ壽府案（B）（C）兩級間ニハ單ニ大小ノ差ノミニシテ特性上區別ヲ要スルカ如キ差異ヲ認メス又商船ノ速力増加ニ鑑ミ「十八節」ヲ「二十節」ニ改ムヘク且機雷敷設裝置ノ如キハ戰時ニ於テ急速之ヲ商船ニ裝備シ得ヘキヲ以テ特ニ之ヲ掲クルノ要ナシト主張シ我方提案ヲ基礎トセンコトヲ求メタルモ他ノ四國何レモ之ニ反對セルヲ以テ我方ハ後日要スレハ再ヒ發議シ得ルノ權利ヲ保留シテ其提案ヲ撤回シ（其後本問題ヲ提起セス）依テ專門委員會ハ壽府假協定ヲ基礎トシテ審議ヲ進メタリ

壽府假協
定及日本
提案

三、壽府假協定及日本提案左ノ如シ

（イ） 壽府假協定

（A） 基準排水量六百噸未満ノ海軍水上戰闘用艦船ハ總テ制限外トス

（B） 單艦基準排水量六百噸乃至二千噸ノ海軍水上戰闘用艦船ハ左記性能ノ何レヲモ有セサルモノニ限り總テ之ヲ制限

外トス

（1） 口徑六吋ヲ超ユル砲ヲ搭載スルコト

（2） 口徑三吋ヲ超ユル砲四門ヲ超エ搭載スルコト

（3） 魚雷發射ノ計畫及裝置ヲ有スルコト